

ミルチア・エリアーデ

J・M・キタガワ

ミルチア・エリアーデ(1907-1986)は、ブカレスト生まれのルーマニア人であった。彼は、自分が、ラテン、ギリシア及びスラヴの各民族と血縁関係を持ち、その言語がラテン語に由来するバルカン民族の一つたるルーマニア人であると大いに意識していた。今日では、多くのルーマニア人、とりわけ知識人や社会の上層部の人々はフランス語を話している。エリアーデもこの二つの言語によって作品を著わした。すなわち、彼は、母国語に対する関心を高めるため、文学作品は主にルーマニア語で著わしたのに対して、学問的な著作はフランス語で著わした。

我々は互いに誕生日が近かった——彼が三月九日で、私が三月八日である——ので、ある年は三月八日に、その次の年は三月九日に一緒に祝うのが、この三十年にわたる幸せな習わしであった。二人ともさまざまな民族の料理に興味があったので、中国、インド、近東、フランス料理をはじめ、シカゴにあるさまざまなレストランで祝宴を張ったものである。そうした時にエリアーデは、第二次世界大戦の終わり頃から二度と見ることがなかったあの町、ブカレストでの少年時代のことを、しばしばなつかしんで語ったものである。長年にわたるこのような親密な交際をおして、私は彼を、一人の学者としても、人間としても深く知るようになり、また尊敬するようになった。

エリアーデは、自分の家系が農民の先祖にまで跡づけられることを誇りにしていた。彼は、ルーマニア正統信仰のうちで育てられたのではあるが、バルカンの農民的世界観のもつ素朴なオプティミズムに、とりわけ、その世界観に固有な自然の死と再生に対する宗教的肯定に惹かれていた。このような農民の世界観は、今日まで保持されてきているものである。エリアーデ家の暮らしは十分に裕福であり、ブカレストには一軒の家を構え、田舎に避暑用の別荘を持つていた。三人の子供たちは父親の多岐にわたる蔵書を利用することができ、また豊かな教育が授けられていた。

第一次世界大戦中には、エリアーデ家の住まいがドイツ軍によって占拠された。これは彼の父の不在中の出来事であり、母を苦しめることになった。しかしドイツによる祖国の侵略ということの政治的な意味合いを正しく理解するには当時エリアーデはまだ幼すぎた。彼は活動的な少年で、友だちやボーイ・スカウトの仲間たちと一緒に過ごすことが非常に多かった。また彼はピアノが上手だったので、パーティーやダンスの際には引っぱりだこであった。

エリアーデは、自分で選択したのもや、自分の好みに合った学科にばかり興味を示して、小学校でも中学校でも特に目立った生徒ではなかった。しかし十三歳頃までには既に、文筆に対して特別の才能を発揮していた。シカゴ時代にある学生が彼に次のような質問をしたことがある。「エリアーデ先生、私がたった一本の学位論文を書くのにも苦勞している間に、どうしてあなたはそんなに多くの本を書いておしまになれるのですか。」エリアーデは、書こうとし続けることをその学生に強く奨めるだけであった。というのは、彼の考えでは「最初の一万語が最も困難であるが、その後はとにかく、あなたもうまく書き続けられるようになる」からである。彼自身は、既にブカレスト大学入学以前に、さまざまな主題について百近くの論文を書いていた。

エリアーデは若くして——それが何歳の時であったかを正確に言うことは困難であるが——、世界は諸々の意味の貯蔵庫であり、我々には覆い隠されているこれらの意味を解読することこそが自分の使命であると確信するようにな

っていたと信じるに足る十分な理由が存在する。この使命感が彼を駆って多くの学問——自然科学、哲学、錬金術、冶金学、民俗学、神話学、象徴論、呪術、エクスタシー、宗教学〈the history of religions〉——に従事させることになった。エリアーデは、これらのさまざまな学問すべてを駆使して初めて宇宙の諸々の秘密を顕にすることが可能になると思っていた。ゲートとバルザックとがこの時代の彼の手本であったということから、彼が傾倒した目標としたものについてなにかを知ることができるであろう。顧みれば、次のことが明らかになる。すなわち、まず、^{ミルチア}実在に対する彼のアプローチは、宗教学に関する著作における「聖なるもの」及び文学作品における「愛」という二つの基本的なカテゴリーにおいて明確に表現されたということである。そして、さらに、彼はこの二つのカテゴリーの間に内的な連関があると考えていたということである。

エリアーデにとって、学問はそれ自身で価値のあるものであったが、それはまた人間を啓発し導くべきものでもあった。このような考え方はブカレスト大学の学生時代のエリアーデを、イタリア・ルネッサンスによって明確にされたギリシア—地中海的文化の伝統における人間存在のモデルの再検討へと導いたのである。彼はこのような探求を有名な「東洋への旅」——カルカタおよびヒマラヤ山脈への——においても続けた。彼は文献研究とそしてヨーガの実践——すなわち時間と空間の世界に巻き込まれながらも、それに囚われることのない不死と自由とを獲得するべく、インドの賢人たちによって実践されてきた古来の技法——との両方をおして、人間存在についてのインド的理想を再発見し、かつ自ら体験しようとしたのである。一九六一年、彼がシカゴで雑誌『宗教学』〈History of Religions〉の創刊に尽力した時にも、彼は同じような情熱を表わした。彼は、この雑誌が、単に西洋の、もしくは他の特定地域の感受性に基づくのではなく、全世界的な経験と洞察とに基づく「新しいヒューマニズム」の発展に大きく貢献することを望んでいたのである。

エリアーデはインドから帰った後、それに続く五十五年間、すなわち一九三〇年代初頭から一九八六年の彼の死に至るまでを、宗教学や他の諸学問及び文学著作活動とおして、さらにまた新しいヒューマニズムの唱導によって、全宇宙の意味と生の構造との解説に費やした。顧みれば、それ以後の彼の五十五年にわたる人生は、ルーマニア時代、パリ時代、シカゴ時代という三段階に分けることができるであろう。

ルーマニア時代

エリアーデは一九三〇年代には、真摯な宗教学者、哲学者、東洋学者として仕事をしてきた。ブカレスト大学で、かつて自分の教師であったナエ・イオネスコの助手を務めるかたわら、彼は小説家及び批評家としての地位を確立し、さらにルーマニア文化を確かなものにするために、同時代の市民たちの一般的教化に向けて貢献していた。そして、第二次世界大戦中には、彼はルーマニアの文化担当外交官としてロンドンに、後にはリスボンに勤務した。

この時代エリアーデは自らを紛れもなく一人のルーマニア人として考え、ルーマニアのために精力的に働いていた。なるほど彼はこの時期にインドのヨーガに関する非常に優れた博士論文を書いて、それが、ヨーロッパの多くの東洋学者や宗教学者の注目するところとなったのである。しかし、ヨーガを熟知しているというこのことを別にすれば、エリアーデが、自分がインドから持ち帰ったと感じていたものは、中国、東南アジア及びバルカン諸国の諸々の農民文化に共通するある基層の農民文化が存在するという理解であった。このような理解に基づいて、彼は、バルカンの農民文化がギリシア正教の伝統と結び付きながらも、文明の内からの統一あるいは再統合にいかんして貢献することができたのかを明らかにするために、バルカンの農民文化の歴史と意味とを探究したのである。

エリアーデはブカレスト大学において、傑出した講師、才気煥発な教師であり、また思い遣りのある助言者でもあったと言われている。しかしながら、イオネスコの助手としての、大学で正規の担当授業を持たない彼の地位は不安定であった。とりわけ、ルーマニア王や教授たちの間に、イオネスコがたとえば「鉄の衛兵」(Iron Guard)といった国家の右翼分子たちに接近しすぎているということに対する嫌疑をかけるものが出てくるようになってからは、不安定であった。しかしながら、大学で教えるということは、この時期のエリアーデにとって最重要事ではなかった。というのは、彼は、小説を書くことや、地方の知識人や芸術家の集まりである「クリテリオン」(Criterion)というグループをとおして公開講演を行うことを含めて、大学の外にもあまりにも多くの関心事を持っていたからである。このグループは、国民文化を今初めて確立することこそ、第一次世界大戦の余波のうちで成長した自分たちの世代に課せられた務めであると感じていた。エリアーデは満場一致でこのグループの指導者及びスポークスマンの役を引き受け、この資格で出版や講演を不断に行った。作家としては、彼は始め、インド体験に基づく自伝的小説によって認められたのであるが、次第に、とりわけ幻想的なるものというテーマをめぐって、筋も文学形式もさまざまなものを採用するようになっていった。

一九三〇年代の終わり頃、ルーマニアは共産主義ロシアとナチス・ドイツとの間に挟まれ、直面する国家的な窮境が克服したいものであるということが明らかになった。ルーマニアはまた政治家たちの連合と王による独裁制の宣言とによって引き起こされた国内の不穏と騒乱にも直面させられた。先にも述べたとおり、時局困難なこの時期エリアーデは海外に派遣され、最初はロンドンに、その後リスボンに、ルーマニアの文化担当外交官として勤めた。彼の最初の妻ニーナが亡くなったのはこのリスボンにおいてであった。この時期、ルーマニア時代の終わり近く、一人の人間としても、また一人のルーマニア人としても、彼は深い孤独を体験し始めていた。

第二次世界大戦の終わり頃、エリアーデは、ルーマニアに共産主義の傀儡政権ができるであろうと感じて、故国に帰るべきか否か真剣に自問したが、究極的には、亡命者〈émigré〉としてパリに定住することを決意をした。そしてこの経験から、亡命者ということが彼にとっては現代の人間の象徴になったのである。彼はフランス語が堪能であったけれども、三十八歳でパリに永住するとなると、適応するのは容易ではなかった。彼は友人のジュールジュ・ドゥメジルの仲介で、ソルボンヌ大学に招かれ教鞭を執った。そして、シオランやその他の同国人たちによって温かく迎えられる。彼は、彼を人間としても、また学者や作家としても、可能な限りのあらゆる方途で励まし、助けになってくれた彼の二番目の妻、クリステイネルとこのパリで出逢い、そして結婚したのである。

容易に推察できるように、パリでの最初の数年間はエリアーデにとって経済的に裕福ではなかった。彼は、当時ボストンにいたクーマラスワミの代理人をとおして、アメリカのある大学でフランス語を教えるように招かれたが、この計画は実現しなかった。もしこの時彼がアメリカに渡っていたならば、彼の人生はどのように変わっていたであろうか。しかしながら、彼は窮乏していたにもかかわらず、利用しうるすべての時間とエネルギーとを、彼の関心をそそったさまざまな学問分野における真摯な研究、読書、思索、著述に費やした。

生涯のこの時期、エリアーデは実に多くの文学作品を生み出した。その中でも、英語で『禁じられた森』〈*The Forbidden Forest*〉というタイトルで出版された彼の傑作——多くの次元と多くの意味をもつ小説——がとりわけ重要である。この小説は、一九三六年から一九四八年の間の主人公シュテファンとルーマニアの人々との一連の複雑な

物語を取り扱っている。読者は、祖国への侵略や、またナチズムと共産主義とによる、あるいは西洋列強の悪意はな
 いが愚直な感受性による脅迫的な影響を、ルーマニアの人々がどのように感じていたのかということについて現実主
 義的な説明を与えられる。この小説はまた、多くの人々の愛、憎しみ、希望、恐れ、野心、善意、裏切り、そして人
 間的な弱さといったものの、諸々の交錯をも描いてみせる。そしてこの小説は、このような悲劇的な諸状況において
 個々の人間の運命が、共同の生と関わりながら、いかにして一点に収斂したりあるいはそうしなかつたりするかと
 いうことを明らかにする。エリアーデは、西洋及び東洋の宗教的、哲学的及び神話的伝統に由来する豊富な象徴と洗
 練された概念とを用いてこのような状況を織り上げ、またその多様な登場人物をとおして、時間、生、死、あるいは
 自由といったものについて深遠な洞察を示している。ドイツ軍によるロンドン爆撃というような出来事の叙述のうち
 やその背後に、彼の個人的な体験があるということが感じられる。

本筋やわき筋が織りなす緻密で複雑なこの織物を貫いているのは、一つの単純な物語、すなわち、主人公シユテフ
 アンが戦前のある聖ヨハネ祭の夜にブカレストのある森の中で神秘的な車に乗った一人の婦人とのようにして出逢
 い、またどのようにして彼女を見失うのかという物語である。十二年後の聖ヨハネ祭の夜にスイスとの国境近くに
 あるもう一つの森で、彼はこの見失った恋人に邂逅する。この小説において、森は歴史的時間の世界から永遠の地平へ
 と逃れようとする人々の心的な理想を表わしており、車は死を意味している。エリアーデは次のように述べてい
 る。

彼は彼女をはるか彼方に見た。彼の心臓は、彼女だとわかるより早く全速力で打ち始めた。彼は走り始めた。道
 のわきにはあの車が止まっていた……。 (*The Forbidden Forest*, trans. Mac L. Ricketts and Mary P. Ste-

venson, Notre Dame, Ind.: University of Notre Dame Press, 1978, p. 578)

彼女は彼に車に乗るように勧め、そして彼らが今までできなかった、互いの愛の告白をした後に、

……彼は欄干を見た。そしてその欄干ごしに彼は、暗やみの中にぼっかり開いた深淵を思い描くことができた。

彼は震え始めた……。その瞬間——唯一で、果てしない瞬間——において、彼が長年の間憧れていた完全な至福が彼に頭になった。彼は、この仕方でこそこうなるのだということを、最初から知っていたのである。彼は知っていた、彼が近くに居るのを感じて彼女が振り返り、彼を見るであろうということを。彼は知っていた、この最後の瞬間、この終わりなき瞬間で十分なのだということを。(p. 596)

この小説において、特に愛についてエリアーデは多くの重要な言明を行っている。この愛が地上では稀にしか実現されないと感じている。しかし、愛は真実に天の賜であり、救済と同様人々によってそのような賜として経験されうる。この意味でエリアーデにとって愛は聖なるものと暗黙の関係をもっている。なぜなら、彼がさらに進んで宗教学〈Religionswissenschaft〉に関する著作のうちで説明して行くように、聖なるものとは宇宙における隠された意味の基礎だからである。

我々にとって最も重要なことは、このパリ時代にエリアーデが、宗レリギオニスム・マセニヤト 教 学のさまざまな次元における重要な論文、書評、小論、著書を出版した後も、卓越した宗教学者としてさらに一層駆り立てられていったという事実である。彼は宗教学者としてより広く知られるようになるにしたいが、スカンジナビアからイタリアに至るヨーロッパの主要な大学から講演をするように招かれ、また、求められて数多くのセミナーや会議にも参加した。カール・ユングやルイ・マッシニョン、G・ショーレムによって有名になった、スイスのエラノスにおける夏の会議もその一つである。不幸にも、しかし、この時期に、ブカレスト時代に彼が創刊した宗教学の雑誌『ザルモクシス』〈Zalmoxis〉は、財政上の困難のため廃刊を余儀なくされたのである。

彼の出版された著作のすべてが、格調高い文体、また類い稀な記憶力に支えられた驚嘆すべき博識、さらには細部にまで注意の行き届いた正確な研究といったものによって特徴づけられているのは、エリアーデの功績である。彼はいつも宗教学∧the history of religions あるいは Religionswissenschaft∨における二つの次元、すなわち歴史的なるものと体系的なるものとを共に念頭に置いていた。それゆえ、歴史的研究においては、特定の宗教的伝統——たとえばヨーガのような——を、専門家たちのようにそれら自身のためにではなく、全人類の宗教経験というより広い観点から考察するように心掛けており、逆に、彼の体系的あるいは形態学的な著作においても、そこで扱われる個々の宗教体系が含んでいる諸々の形式や方向づけや価値を無視することはなかった。人間の経験から離れては、それだけで独立に「宗教経験」と見做されうるものはありはしないということこそ、彼の確信するところであった。したがって、彼は、人間の文化的及び宗教的な諸々の経験から切り離して宗教的伝統を取り上げることがないように心掛けていた。他方で、彼は、宗レリギオンズ教ワイルドネス学が、単に歴史的、文化的、心理学的、人類学的、社会学的、経済学的あるいは芸術的な方法によるだけでは遂行されえないと信じていた。宗レリギオンズ教ワイルドネス学というこの学問は、それなしでは諸宗教の歴史∧the history of religions∨が意味を持たない「聖なるもの」という本質的特性に忠実でなければならぬ。このような観点から、彼は、聖なるものの諸々の意味を神話や象徴や儀礼というような宗教の諸要素によって叙述したのである。

この時期、エリアーデは歴史学的著書と体系的著書とをほとんど同時に出版した。ここでの議論のためには三冊の研究書を取り上げれば十分であろう。まず第一に、我々は、彼の著書『シャーマニズム』∧Shamanism∨において達成された学問に対する重要な貢献に敬意を表する。彼がこの著書を著わしたのは、民族学者としてでも、また極北圏文化の専門家としてでもなく、宗教学者としてであった。なぜなら彼にとっては、極北圏のエクスタシーの技法

の伝統を叙述することにおいても、シャーマニズムは人類の宗教史の非常に重要な遺産だからである。エクスタシーに関する彼の研究は、宗レリギオン教スクリューセンシャフ学における歴史的の研究の一部門である「宗教の歴史」〈history of religion〉を大いに豊かにした。⁽²⁾

パリ時代の他の二つの著作は、『比較宗教学における諸類型』〈Patterns in Comparative Religion〉及び『永遠回帰の神話』〈The Myth of the Eternal Return〉というタイトルで後に英語に翻訳され、宗教学者の間では古典となつたのである。これらの研究書は、神話、象徴、儀礼、中心、天なる原型、反対の一致〈coincidentia oppositorum〉に関する彼の理解に基づき、エリアーデの体系的あるいは形態学的な研究を代表しているものである。彼の体系的研究がいかなる宗教的伝統の真理要求をも、また救済論的教義をも取り扱わないということ、エリアーデは、ある面において長い間、単なる歴史家、単なる人文学者、あるいは単なる人類学者にすぎないと非難されてきた。宗教哲学者や神学者とは異なり、エリアーデの基本的な関心は本質的に解釈学的である。すなわち、宗教経験をいかにして理解するか、及び、諸々の宗教現象を（G・ヴァン・デ・レーウが強調したように、意義深く）いかにして体系化するかという点にある。彼は「宗教の理論的根拠」〈the religious rationale〉や「諸々の宗教的伝統」に精通し、またそれらに深く共感していたけれども、宗教的教理や人々の信仰の対象、あるいはまた教義それ自体を取り扱おうとはしなかった。他方で、彼は、宗レリギオン教スクリューセンシャフ学が、宗教的事実や形式や構造の単なる「科学的な」〈scientific〉（この言葉が現在用いられている英語の意味で）研究であるべきであるとも、またそうありうるとも決して考えなかったのである。

ここで付け加えるならば、我々、一九四〇年代にシカゴ大学で宗教学を学んだ者は、我々の恩師であったヨアヒム・ヴァッハがしばしばエリアーデに言及するのを聞いたものである。ヴァッハは、宗教学を専攻するすべての学生

が、少なくとも次の三冊の書物、すなわち、ルドルフ・オットーの『聖なるもの』、G・ヴァン・デ・レーウの『宗教の本質と現われ』、*Religion in Essence and Manifestation*、及びミルチア・エリアーデの『宗教学概論』、*Traité d'histoire des religions*——英語版は『比較宗教学における諸類型』——に精通していなければならないと考えていた。ヴァッハは、とりわけインドにおける彼のバロウズ連続講演、*Barrows Lectures*、において、エリアーデの名を高く評して熱狂的に広めていた。彼は、一九五四年にアメリカのさまざまな大学で行われた宗教学に関するアメリカン・カウンシル・オブ・ラーニッド・ソサエティーズ・レクチャーズ、*the American Council of Learned Societies' Lectures on the History of Religions*、においてもこれと同じ内容の講演を繰り返し返した（ヴァッハの遺著『諸宗教の比較研究』を参照。『*The Comparative Study of Religions*, ed. J. M. Kitagawa [New York: Columbia University Press, 1958]』。ある時にはヴァッハは、時間に関するエリアーデの見事な分析と、今日では有名になった「歴史の恐怖」、*the terror of history*、という彼の概念を称賛していた。また別の機会には、ヴァッハは、国や都市や寺院の「天なる原型」、*the heavenly prototypes*、に関する我々の知識をエリアーデは大いに増してくれたとも述べている。このように、我々はエリアーデの書物から、中心の象徴表現や宇宙軸、*axis mundi*、の概念という——それ以来、常用句となった——重要な諸概念を学んだのである。⁽³⁾

この当時ヴァッハは、一八九三年の万国宗教大会、*World's Parliament of Religions*、の直後にキャロライン・ハスケル夫人からシカゴ大学に遺贈された基金に基づく講演であるハスケル講演、*Haskell Lectureship*、の講師選考委員会の一員であった。エリアーデは、ルイ・マッシヨン（一九五三年）やフリードリッヒ・ハイラー（一九五五年）などの宗教学の偉大な先駆者たちに続いて講師になるよう求められていたが、一九五五年の夏、交渉の最中にヴァッハが亡くなってしまった。私と妻はその葬儀に参列したのであるが、その直後に、エリアーデがそう遠くない

アスコナにいたることをヴァッハの妹が知り、我々は、彼を訪問しようとしたが無駄であった。しかしながら、私はその次の夏にそこで彼と会った。そして、彼は、その次の学年にシカゴでハスケル講演を行うことを承諾したのである。その時、彼が、主としてインドで学んだ自分の英語がシカゴで通じるとよいのだがと言いながら浮かべた苦笑を、私は今でもはっきり覚えてゐる。

シカゴ時代

ハスケル委員会の招きでシカゴにやって来た時、エリアーデ夫妻はこの町に一年以上留まる考えはなかった。彼らにはどうしてもパリに戻らなければならない理由があった。というのは、フランス・スエズ運河派遣団で勤務するためポートサイドに駐在していた医師である友人のために、彼らはパリで家の管理をしていたからである。一九五六年にナセルがスエズ運河の国営化を決定したためにエリアーデのその友人がパリに戻らねばならなくなり、それによって今度はエリアーデがもう少し長くシカゴに留まることを決意させられたということは、歴史の皮肉であった。⁽⁴⁾彼のハスケル講演は暖かく受け入れられ、その内容が『生と再生』〈*Birth and Rebirth*〉というタイトルで出版された。このようにしてエリアーデはシカゴ大学神学校〈*the Divinity School*〉——それ以後解散されることになった連合神学部〈*the Federated Theological Faculty*〉と協定して——において、また学位認定を行う社会思想委員会において教鞭を執ることになり、彼の生涯の最後の三十年にあたるシカゴ時代が始まったのである。

エリアーデのシカゴ時代は、北アメリカにおける宗教研究の独特の時代と一致していた。この時期、連邦最高裁判所は公立学校における祈りの時間を既に廃止しており、主要なプロテスタントの教会やローマ・カトリック教会及び

ユダヤ教寺院への礼拝参加者が減少するという兆候があったにもかかわらず、第二次世界大戦後、州立や私立の大学で急速に数を増した宗教や宗教研究の学科への入学者の数は着実に増えつつあった。これらの宗教学科は、宗教学によって提供される教育のゆえに、大いに必要とされた。というのは、これらの宗教学科が、宗教を教えるのではなく、むしろ宗教について教え、そして好んで二つ以上の宗教的伝統を念頭に置く教養ないしは人文学部^{リベラルアーツ}のうちに通常は開設されていたからである。ヨアヒム・ヴァッハの先駆的な仕事のおかげで、当時シカゴ大学は、このような教育で有名になった数少ない研究機関の一つであり、多くの人々がこの大学の課程に出願したのである。エリアーデの宗教学に関するいくつかの著作が、この時期に英語に翻訳され、テキストとしても、また一般的な書物としても広く読まれたということもまた好運であった。エリアーデの簡潔だが格調高い文体や現代的な言葉使いが、また、彼が宗教に関する洞察を文学、芸術、心理学、民族学などさまざまな学問分野に関係づけているということが、宗教学をますます魅力的なものにした。

エリアーデは自分の人生について経歴という観点から考えることが全くなかった。それが彼の人柄でもあった。彼は、金銭や名声あるいは便宜とは関係なく、自分自身が従うべき予定表を持っていた。イースト・コーストに設立された、人文学のためのアルバート・シュバイツァー・プロフェッサーシップ^{the Albert Schweitzer Professorship for the Humanities}の十の教授職のうちの一つを、多額の給費付きで差し伸べられた時、彼はただ、シカゴにいて十分満足であり、移り住む理由が見当たらないとだけ言って、その名誉を辞退した。またパウル・ティリッヒが亡くなった時にも、ティリッヒが毎冬教えていたカリフォルニア大学サンタ・バーバラ校から、来てくれるように求められた。しかしながら、この時も彼は、この申し出に対しては感謝したが、ある小説を執筆している真最中であるからと言って、辞退したのである。

長たらしい教授会を含めて、エリアーデは概して会合や会議に我慢がならなかった。しかしながら、彼は宗教学者の集まりには好んで参加した。彼と私は、国際宗教学会 (IAHR) の、東京、マールブルク及びストックホルムにおける会議や、フィンランドで開催された同学会の地域の研究会議と一緒に参加した。これらのうちで、エリアーデ夫妻がとりわけ楽しんだのは日本での会議であった。日本を訪問するのは彼らにとっては新しい経験であり、彼らは日本の宗教について多くの書物をしてこの旅に備えていた。エリアーデは、とりわけデパートに行くことを好んだ。というのは、エスカレーターのところでは女性たちが「いらっしやいませ」と声を揃えて迎えてくれるからであった。彼がこの歓迎の響きを聞くことができるようにと、我々はあちこちのデパートに行ったものである。また、我々は大阪で文楽鑑賞に行った。エリアーデはこれを非常に楽しんだ。その後で、エリアーデ夫妻、ジョセフ・キャンプベル、それから我々夫婦の五人で、私のある友人と一緒に神戸で夕食に行くことになっていた。我々は午後五時半大阪発の列車に乗り、三ノ宮駅で下車するように言われていた。三ノ宮駅でその友人が待っていてくれることになっていたのである。五時十五分、列車が——我々が乗る列車ではないが——プラットホームに入って来た。私の妻とエリアーデ夫人は空席を見つけるとどうでもこうでも列車に乗り込んでしまった。もちろん列車は駅を出てしまった、男たちと荷物とを残して。「西洋の女どもときたら!」、我々の荷物を運んでいた赤帽がこう叫んだ。「日本の女だったらこんなことは起こらないね。いつも亭主の後をついて歩いているんだから!」エリアーデは、この赤帽は賢者であると決め、我々が結局神戸駅でこのご婦人方に追いついた時、この赤帽の評を彼女たちに伝えたのである。

この会議の後、エリアーデは東北大学で講演をするように求められた。目的地への旅の途中、彼は松島の絶景に深く感動した。講演の後、石津教授と堀教授とが彼を仙台駅まで連れて行かれたが、駅で彼らは、北に向っている嵐のために列車が遅れていると知った。そこで一行は、列車の見張りとして大学院生を一人プラットホームに残して、コ

ヒーを飲み喫茶店に行くことにした。しかしながら、一つの思想を説明する時にエリアーデがどれほど熱中することになるか、彼らは思いもよらなかつたのである。エリアーデはいつものように情熱的に主張すべきところを語り始め、その大学院生の知らせを無視してしまつた。結局、この学生は、エリアーデが話し終えた後に漸く、列車が来たこと、そして既に行つてしまつたことを報告することできたのである！ ちようど、あるアメリカ空軍機が間もなく仙台から東京へ向けて離陸する予定であつたので、エリアーデはその空軍機で、当初の計画よりも一足早く東京に戻つたのである。

多くの人々が彼の『日記』を読んで知つていくように、エリアーデの栗鼠好きは伝説的になつていた。また彼は小さな子供たちのよい友でもあつた。子供たちの方でも不思議な仕方で彼の愛情を感じ取つていた。私の同僚であるマーティン・E・マーティーは、彼が最初にエリアーデと会つたのは、わが家でエリアーデが我々の小さな娘と遊んでいる時であつたと言つてゐる。彼はパイプ・クリーナーから何匹もの猿を作り出しては彼女を大いに喜ばせたものである。

エリアーデ夫妻と親しかつた人々は、夫妻の控え目でよく練られたスケジュールに感銘を受けた。夫妻は曆の上で一年を大きく二つに分けて、六月から十月始めまでの長い夏をヨーロッパで過ごし、一年の残りをシカゴで過ごすことにしていた。彼は春には決して教えなかつた。彼は講義することが実り多いとは考えていなかったから、それゆゑ、大して努力もしなかつた。しかしながら、彼は、学生たちの考えに、深い、そして学識ある批評をすることに熱心であつた。彼は、宗教学の同僚たちや、哲学者のポール・リクール、神学者のパウル・ティリッヒと合同授業をすることを好んでいた。また彼は、学生たちと会うことを好んだが、彼らの話を聞くのに時間を浪費することは嫌つた。そこで彼は、学生たちが成績のことで彼のところに議論をしに来ないように、実際に彼らが値するよりも良い成

績を彼らに与えるといったことさえした。概して彼は講義よりもむしろ著述の方を好んだ。彼には後僅かの時間しか残されておらず、また述べて置くべきことはまだ多く残っていることを、次第に自覚するようになると、彼は起きている時間のすべてを著述に費やすようになったのである。

エリアーデはこのシカゴ時代をとおして、自らを一人の亡命者であると見做し続けた。しかしながら、彼は、亡命者であるという事情がアメリカの市民権を獲得することと矛盾しないという結論に結局は到達した。帰化試験で良い成績が取れたと思うかと質問された時、彼は穏やかに「B マイナスかな」と答えた。

アメリカ時代をとおして、エリアーデは自分を、宗教学、東洋学及び哲学に従事する一人の学者であると、また一人の作家であると考え続けた。しかしながら、彼が多くの人々にとって宗教の人文学的研究の象徴になるということは避けられないことであった。またある筋では、彼が拒んだにもかかわらず、一人の祭司、賢人、グル／＼にさへなっていた。エリアーデは、彼が編纂した資料集『原始宗教から禅まで』／＼『From Primitives to Zen』や、それよりも歴史学的な分析である『世界宗教思想史』／＼『A History of Religious Ideas』によって例証されるように、諸諸の宗教現象を主題的歴史として扱うものなど、絶えず、宗教現象を取り扱う新しい方法を追求していた。彼の最後の主要な仕事は、一九八七年初めにマクミラン社から刊行されることになった『宗教百科辞典』／＼『the Encyclopedia of Religion』／＼全十六巻の編集であった。西洋以外の宗教及び文化を、単に西洋的方法によって分析され、体系化され、説明されるべきデータの塊としてのみ捉える多くの西洋の学者とは異なり、エリアーデは、この百科辞典において、西洋の学者と非西洋の学者とが共同して、全人類の歴史における宗教経験をとり扱うのにふさわしい方法を発展させることを欲したのである。

一九八六年四月のエリアーデの死は、宗教学におけるこのような百科辞書的体系家／＼encyclopedic system-mak-

かしながら、エリアーデのヨーガ研究が例証しているように、個々の宗教を人類の宗教経験全体という観点から考察するのであるという点が注意されなければならない。

言葉の類似のゆえに、「諸宗教の諸歴史」呼ばれているもの——たとえば、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教、仏教、神道などの伝統的な諸研究——が宗教学であると誤って考える者もあった。そして、宗教学というこの名が、個別の宗教に関するあらゆる種類の研究に対する学問的な傘を彼らに提供することになり、その結果、実際には、ユダヤ教神学者や教会史家が宗^{レリギオンズ・ソシヤリティ} 教^{レリギオンズ・ソシヤリティ} 学の学者になったのである。「諸宗教の諸歴史」という言葉のこのような誤った用法が明らかかな魅力を持つのは、この言葉が、語学の訓練や歴史的背景及び文化的背景に精通することという最小限の学問的な要求を維持しながらも、「宗派的な」〈sectarian〉ものを含む非常に多種多様な見方や方法論を許容するからであるということ、我々は認めなければならない。西洋以外の宗教の一つに関して早急に専門家になろうとしている西洋の学者や、自分自身の宗教的伝統とのみもつばら関わっているアジア人の宗派的学者は、この言葉が自分の研究をも許容するものであるというこの点を好んで強調する。

B 「宗教の歴史」〈history of religion〉(単数形であることに注意)、エリアーデのシャーマニズム研究におけるエクスタシーの研究のような、神話、象徴、儀礼に関する学問的研究。

多くの西洋諸国で、このアプローチは非常に一般的になった。西洋的な哲学や科学及びマルクス主義的な哲学や科学の両方あるいは一方を、客観的普遍的実^{リアリティ} 在^{リアリティ}または客観的普遍的真理へと導く最良のガイドであると考えている人々は、自分の思うとおりのものを、神話や象徴や儀礼のいわゆる「客観的、科学的研究」として展開しようとする。我々は、宗^{レリギオンズ・ソシヤリティ} 教^{レリギオンズ・ソシヤリティ} 学を学ぶ学生たちが誘惑されてこのような落とし穴に陥らないように警告

しなければならぬ。

II 体系的

従来さまざまな種類の体系的研究が試みられてきた。そのうちでもとりわけ優れているのは、現象学的研究（ヴァン・デ・レーウ）、社会学的研究（ヴァッハ）、形態学的研究（エリアーデ）、及び歴史学的研究（クルト・ルドルフ）である。これらの体系のほとんどは、宗教現象学者が判断停止の原理と呼んでいるものに、すなわち個々の宗教の真理要求の括弧入れに、何らかの仕方から従っている。宗教の体系的次元が、現代の西洋の諸言語の意味する「科学的」〈scientific〉ではなく、歴史的研究の論理的一般化〈logical generalization〉であるということは明らかである。したがって、ペッタツォーニとエリアーデとが繰り返し主張するように、歴史的研究と体系的研究とは共に宗教学に不可欠な二つの側面なのである。

ここで、「比較宗教」〈comparative religion〉より正確に言えば「諸宗教の比較研究」〈comparative study of religions〉について少し触れておかなければならない。この言葉は、宗教学哲学と宗教学とが明確に区別されていなかった当時のイギリスで「宗教学」〈the history of religions〉という言葉と交換可能な概念として用いられた。「比較宗教」という言葉は、三階建ての家のように構成される学問を構想していた学者たちの間で一般的になった。この学問はまず、個々の宗教の単純な歴史的研究から始まり、次に、このような研究に基づいて、さまざまな宇宙論、神学、倫理学、さらには象徴や儀礼を分類するという仕事が行われ、最後に漸く、一定の客観的諸基準——哲学、心理学、人類学、さらには神学さえも——に従って諸々の異なった宗教的体系の比較が行われるというものである。一八九三年にシカゴにおいて開催された万国宗教大会以来、比較

宗教というこの言葉は、「問—信仰的」∧inter-faith∨あるいは「問—宗教的」∧inter-religious∨な対話という問題を真剣に考える人々によって好んで用いられてきた。文化的、宗教的に異なる背景やルーツを持つ人々が一緒に生きることを余儀なくされている今日の世界においては、このような意味における比較宗教は疑いもなく魅力的であろう。しかしながら、「問—信仰的」あるいは「問—宗教的」対話は重要ではあるけれども、それは宗教の学^{レリギオンズ・フンクショナル}の範囲を本質的に越え出ている。

このような宗教学の概要は「百科辞書的体系家」の時代の中に展開され、エリアーデの多くの作品の中で明確に表現された。宗教学は、我々が宇宙の隠された意味を解読するための最も重要な道具の一つであり、また今日の世界において非常に強く求められている「新しいヒューマニズム」の展開へと我々を導く一つの道具であるということが、エリアーデの堅い確信であった。彼は生涯の最後の瞬間に至るまで、次のように信じていた。すなわち、我々のすべて、つまり、

ホモ・ファ、ベルの直接の子孫たちもまた、……原初以来ホモ・レリギオースを支配し続けてきたのとまさに同じ、恐れ、希望、確信を再現している。すなわち、死の恐怖や生命の破局的な絶滅にさえ向けられている恐怖、また儀礼的に構成される死後の生をとおして死を克服しようとする希望、さらには、生命の不滅や靈魂の不死は一連の意識状態として、そのまま受け入れられるべきであるという確信、このようなものをやはり再現しているのである。

エリアーデはさらに次のように付け加える。

もちろん、ある種のホモ・レリギオースたちはこれに付け加えて、意識の最高の状態、つまり純粋な存在者の

覚知にまでいかずに到達するかを争うことは、我々すべての問題であると言うであらう。(Eliade, "Homo Faber and Homo Religiosus", in *The History of Religions: Retrospect and Prospect*, ed., J. M. Kitagawa [New York: Macmillan, 1985], p. 11) 木村勝彦訳「黎明を待ちつづ——ホモ・フマーベルとホモ・レリギオース」『ユリイカ』vol. 18-9 / エリアーデ特集号 / 昭和六十一年九月, pp. 246-258. 引用箇所は p. 257.)

ミルチア・エリアーデもこの種のホモ・レリギオースの一人であったと、我々は深く確信している。

註

- (1) 宗教学における彼の方法、すなわち形態学 (morphology) は、ゲーテの洞察に負うところが多い。...
- (2) ここで重要なことは、我々がこの部門を、もう一つの部門である諸宗教の歴史 (histories of religions) / すなわち個々の宗教的伝統の歴史的研究から区別しているという点である。
- (3) 祭祀の中心として古代中国の都市を考察した、ポール・ウィートリィの研究の中に、宇宙軸というエリアーデの概念の強い影響があるという点に注意することは重要である。Paul Wheatley, *The Pivot of the Four Quarters*, [Chicago: Aldine, 1971] を参照。
- (4) 彼らは三十年間も留まることになったのである。

(保呂篤彦訳)

会報

通知発送

○『宗教研究』編集委員会

日時：昭和六二年三月一日（水）午後六時

場所：学士会館本郷分館

出席者：井上順孝、江島恵教、金井新一、田島照久、月本昭男、鶴岡賀雄、華園聰磨、脇本平也

議題

一、『宗教研究』第六〇巻第二輯（269号）、同第六〇巻第三輯（270号）刊行報告。

一、『宗教研究』第六〇巻第四輯（271号）、同第六一巻第一輯（272号）刊行予定報告。

一、『宗教研究』第六一巻第二輯（273号）、同第六一巻第三輯（274号）編集方針。

○常務理事会

日時：昭和六二年四月一八日（土）一時半～二時

場所：学士会館本郷分館八号室

出席者：安齊伸、井門富二夫、石田慶和、植田重雄、上田閑照、金井新一、後藤光一郎、竹中信常、田丸徳善、

中川秀恭、藤田富雄、柳川啓一、脇本平也

議題

一、昭和六二年度日本宗教学会評議員選考委員選挙日程の決定

五月 七日（水）投票資格（会費納入状況）についての

六月 六日（土）有権者資格締切

六月 一七日（水）選挙管理委員会（有権者資格認定）

七月 八日（水）投票用紙発送

八月 八日（土）投票受付締切

八月 一五日（土）選挙管理委員会（開票）

九月 四日（金）当選者の辞退申出締切

九月 一八日（金）評議員選考委員会

一、選挙管理委員長選出

互選により田丸徳善氏を委員長に選出した。

○理事会

日時：昭和六二年四月一八日（土）午後二時～四時

場所：学士会館本郷分館八号室

出席者：安齊伸、井門富二夫、石田慶和、上田賢治、植田重雄、上田閑照、金井新一、窪徳忠、小池長之、後藤光一郎、佐木秋夫、竹中信常、田丸徳善、中川秀

恭、中村廣治郎、藤田富雄、堀越知巳、松本皓一、真野龍海、柳川啓一、脇本平也、渡辺宝陽

議題

一、日本宗教学会第四六回学術大会について

九月 一六日～十八日の間、立教大学において行われることが、開催校である立教大学の藤田富雄教授より報告され、了承された。

なお、日程の概要は次の通りである。

九月一六日(水) 公開講演、理事会

九月一七日(木) 研究発表、評議員会

九月一八日(金) 研究発表、総会、懇親会

発表申込み締切は七月四日、発表概要の締切は七月三
一日。

一、昭和六二年度日本宗教学会賞選考委員について

今年度の選考委員として、上田賢治、金井新一、長谷正

当の三氏が昨年に引続き選任され、岡田重精、早島鏡

正、松本皓一、山形孝夫の四氏が新たに選任された。

一、新入会員について

別記四二名が入会を承認された。

○第四一回九学会連合大会

日 時：昭和六二年五月一〇日(日) 午前九時五〇分～午後

五時一〇分

会 場：昭和女子大学

本学会からは、石井研士氏が「都市化と神社」の題で発表を
行った。当日の理事会には齋田稔氏が出席された。

執筆者紹介（執筆順）

大峯 顕 大阪大学教授

小林 恵一 関西外国語大学教授

杉尾 玄有 山口大学教授

竹原 弘 徳山大学助教授

氷見 潔 奈良県立短期大学助教授

間瀬 啓允 慶応義塾大学教授

J・M・キタガワ シカゴ大学教授

A Philosophy of Religious Pluralism

Hiromasu MASE

ABSTRACT: The relation between human response to the ultimate divine Reality and the cumulative religious traditions within which this occurs, has produced many different thoughts. The main thoughts are three in number. The first, which we may call “exclusivism”, relates salvation/liberation/*satori/kenshō* exclusively to one particular tradition. The second, which we may call “inclusivism”, sees this as taking place within the contexts of all the other great world traditions, but regards this, though it happens, as the source of salvation in one particular tradition. The third, which we may call “pluralism”, accepts that this is taking place within all the great religious traditions, so that it frankly acknowledges that there is a plurality of saving human responses to the ultimate divine Reality.

Today’s major discussion of forming a theology of religions or a world theology seems to circle around and reflect religious pluralism as a comparably simpler and more realistic model of thought. Religious pluralism is the view that there is not merely one way but a plurality of ways of salvation/liberation/*satori/kenshō*. In other words, there is a plurality of divine revelations making possible a plurality of forms of saving human response.

Thus the main thing to do in this article is to provide a philosophical framework for religious pluralism and justify it as a new chapter of modern philosophy of religion.

The Philosophy of Absolute Nothingness
in West Germany

—Concentrating on the Study on
NISHITANI by H. WALDENFELS—

Kiyoshi HIMI

ABSTRACT: In West Germany many studies on the philosophy of absolute nothingness have been made and from among them this paper considers the study on Keiji Nishitani by H. Waldenfels.

Waldenfels has made it his theme to accomplish mutual understanding between Buddhism and Christianity. The philosophy of absolute nothingness, which he regards as a remarkable philosophical development of Buddhist thought, is an important representative on the side of Buddhism.

At first this paper will discuss how he values the philosophy of absolute nothingness among the tradition of Buddhist thought and how highly he regards Nishitani's thought from the viewpoint of its modern characteristic, especially in relation to Kitaro Nishida.

Next this paper wants to look over how largely he has accepted Nishitani's theory on absolute nothingness or "śūnyatā" and how he has brought abundant fruits into the theological research and has built means by which a deeper dialog with Buddhism can be developed. It is most important that he intends, following Nishitani, to think personality again from the standpoint of "śūnyatā" and from there he will develop the possibility of the new experience, not only about human relations but also about the relation between God and man.

Key Words: absolute nothingness, śūnyatā (emptiness), dialog, Keiji Nishitani, Hans Waldenfels, nihilism, egotekikankei (circuminsessional relation), kenōsis (emptying), ekkenōsis (self-emptying)

The religiousness in Heidegger's philosophy

Hiroshi TAKEHARA

ABSTRACT: Heidegger mentions that one of the characteristics of modern times is the "Entgötterung." The "Entgötterung" is the state of loss of decision with regard to the god and the gods. And he says that this occurrence causes bring about the religious relation with god.

Heidegger has a view that modern times is the epoch of subjectivisme which began from Decarte and Nietzsche accomplished. In a word, modern times is the epoch of objection of the world with the schema of subjest-object relation.

Heidegger says that on the ground of this, Nihilisme is given rise to. Nihilisme is not the loss of supreme vale, as Nietzsche insisted, but the concealment of Being. Within the original openness of Being, the human being and the god form the mutual dependent play space. By the conealment of Being caused by the objectivation of the world caused by uprising of modern subjectivisme, the relation of human being and god is changed into the relation between a believer and the god, and the relation with god became insided. This is the religiousness Heidegger insists.

Nishida Philosophy and Dogen's Zen

Gen'yu SUGIO

ABSTRACT: In his later years, Kitaro Nishida refers to Dogen often in his articles, perhaps because he was opposed to Hajime Tanabe's studies in Dogen. Nishida Kitarō wrote in a number of places regarding Dogen. Nishida had ardently sat in *zazen* during his youth, and it was thus not at all strange that he later showed an interest in Dogen. Only, rather than reading Dogen faithfully and in detail, he seems to have been attempting a forced interpretation of Dogen by his own philosophical logic. Though regrettable, his forced interpretation may have been natural for him. We must allow for his place as a highly creative thinker.

It seems difficult to apply Nishida's logic of *zettai mujunteki-jikodoitu* (self-identity in absolute contradictory) directly to Dogen, who never viewed human beings as mere common mortals. However, both Dogen and Nishida were agreed that the *choetuteki-issha* (the Absolute Being), in Nishida's term, gives forms to all things in nature as its self-limitation and self-expression. Therefore, we may say that Nishida's logic is of great use for the understanding of Dogen, especially for the precise interpretation of the *Shobogenzo*.

Hermeneutics and the Analysis of Religious Speech

—Dealing Chiefly with a Textual Analysis of Genesis—

Keiichi KOBAYASHI

ABSTRACT: It is the chief task of hermeneutics to read texts and interpret what they means, to extract meaning and denotation from the text. So-called philosophical structuralists, however, deny the denotative aspect of texts, and say that by extracting the fundamental structure of the text, similar structures can be discovered apart from the text, in such other areas as social structure.

But in this kind of deep search, only one aspect of the textual structure is emphasized, with the result that the text is not being read in its entirety. In the posture of reading a text, it thus appears that several semiological approaches are appropriate.

In this context, when structuralist Edmund Leach's analyses of several tales within the biblical account of creation are compared and analyzed based on semiological methods, it appears—per expectation—that the latter is the more trustworthy method. In addition, structuralists deny the "denotative" nature of language, but the fact that texts have denotation can also be confirmed through the semiological approach. As a result, from the standpoint of hermeneutics, which places heavy emphasis on this denotative aspect, it appears that the semiological analysis of texts is both fruitful and necessary.

The Dimension of Depth and the Horizon of Reason

Akira ŌMINE

ABSTRACT: Heidegger and Tillich considered the spiritual condition of the modern world as a matter of a loss of the “dimension of depth.” This expression declares on the one hand that the problems of the modern world are in essence religious problems, while on the other hand it declares that the problem of religion is not merely a problem of human consciousness, but the problem of human existence itself. The loss of the dimension of depth thus means the problem of religion in these two overlapping senses.